

安心・安全を守る取り組み～保護者・児童との連携を養護教諭の視点から～

1. はじめに ～きっかけは感染症対策～

令和5年5月、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行され、令和6年3月現在、学校生活は以前の姿に戻りつつある。平成27年12月中央教育審議会により「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」等の答申が出された。それにより、どの学校もチーム学校としての組織力の必要性は、普段から意識してきたはずだった。そして約4年後、未曾有の感染症対策における健康管理への危機感が、学校における真の力を試される時となった。その時、本校は、チーム学校とは教職員だけでなく、保護者やその他関係者の力によって向上するものであるということを実感して得ることができた。当時、未知なるウイルスを目の前にして、健康管理や感染症対策は模索の日々であった。振り返ってみると、予測困難な状況であったからこそ生み出されたことや、文化があり、これらが現在の本校の学校づくりに繋がっていると考えた。

2. 【教員】 子どもの安全・保護者の安心を第一に

令和2年、コロナ禍における学校再開に向けて、文部科学省から出された「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～『学校の新しい生活様式』～」や各自自治体の「学校再開ガイドライン」を手掛かりに、教職員で除菌・清掃マニュアルや啓発動画を作成し、実施した。

教職員が行っていたトイレ、教室の清掃・清掃の様子 (令和2年度本校研究部作成 清掃マニュアル動画より)



約2か月の休校期間中に、清掃方法の見直しや、正しい除菌方法、効率的な時間、使用する用具のコストなど、実践と検討を繰り返して話し合いを重ねた。しかし、学校が再開すると、想定したスケジュールでは上手くいかず、除菌グッズの品薄や値上がりで物品を確保できずなど多くの問題が生じたが、その度に新たな方法を試みた。消毒に関しては、令和2年8月の見直しにより、文部科学省から「過度な消毒とならないよう、十分な配慮が必要だ」という通知がされたが、それまでは児童の安全を第一に考え取り組んできた。コロナ以前とは異なる生活環境・業務環境の中で感染症対策・対応を行っていたため、教職員の業務的・心理的負担の増加から教員のメンタルヘルス対策も課題となった。

3. 【保護者】 保護者委員会・ボランティア活動

※ここでの委員会とは、本校の保護者組織のことである。



学校再開から2週間が経ち、教職員の活動を知った多くの保護者が、除菌・清掃のボランティアを申し出てくれた。まずは、健康安全委員会の協力で、トイレの除菌と清掃を手伝ってくれるようになった。北館・東館合わせて6カ所あるトイレを当番制で、1日15～20人ほどの保護者が参加してくれた。次に、図書委員会も図書室の換気や除菌などの環境整備、書籍除菌機を使用した本の除菌作業をしてくれたおかげで、安心して図書室を使用できるようになった。さらに、保護者ボランティアの協力、除菌・清掃用具のご寄付など、たくさんの方が本校の取り組みに全面的に協力してくれた。これらの活動の効果は、学校施設を清潔で安心、安全に使用できるようになっただけではなく、コロナ禍における課題の一つとなっていた、児童の心のケアにおいても大きな役割を果たしてくれた。保護者が「子どもを守る」(学校を清潔にしてくれることや、声かけなど)ことを児童に分かりやすく、実感しやすい形で行ってくれたことが、学校全体に大きな安心感をもたらした。そして、私たち教職員はこれらの協力により、様々な行事や教育活動を止めることなく進めることができた。このように、保護者が学校の取り組みに積極的に参加できるようになったことで精査できたことや、新たに取り組めた活動がある。

毎週木曜日実施 教職員による清掃活動



研究会議後に除菌やトイレ清掃を実施

保護者や卒業生たちと協力した 裏庭・畑改造 プロジェクト



保護者の協力

職員作業

ふくろうガーデンとして改装

栽培活動で野菜作り

ザリガニ釣り

一部の教職員(専科教員や養護教諭)が授業時間中に実施していた、除菌・清掃活動は、週1回、研究会議後に全員で実施するように変更した。(※ただし、教室、階段の手すりなどの除菌・清掃は、毎日実施。)また、草が生い茂っていた裏庭を大規模に改造した裏庭プロジェクトは、その後次々と実施した環境整備のきっかけとなった。これに関しては、感染症対策で換気をするにあたり、屋外からの虫の侵入を防止するために、教職員で除草や樹木の伐採を積極的に行ってきた経緯がある。このように、当時の困難な状況の中で新たに生み出された場所、活動、思いは形を変え、今も引き継がれている。当時、最初に協力を申し出てくれた健康安全委員会の活動も、この4年間の間に感染症の流行や学校の状況の変化に合わせて形を変え、今も継続して行っている。当初、トイレ除菌清掃だった活動は、校内全体の清掃に広がり、廊下や階段などの清掃を行う常時活動になった。さらに、児童と教室を掃除する親子清掃、学校行事(式典、研究発表会前など)に合わせた特別清掃も行っている。また、PTA役員を中心とした保護者一斉清掃も始まり、児童の学ぶ環境の整備が進められている。

特別清掃の実施後は、毎回アンケートを取り、より良い活動へ改善するようアイデアを出し合っている。

健康安全委員会主催 清掃後アンケートより

エアコンを新設されてそんなに経過していませんが、意外にホコリがたくさんついてびっくりしました!普段はできない場所なので今後親子清掃の際にぜひお願いしたいと思いました。

サーキュレーターの清掃時、松居棒では届かない細かい所があり、より細い清掃用具、もしくはもう少し分解して掃除できたらより綺麗になるのかなと感じました。

机や椅子の脚の底面が汚れていると思うので定期的に清掃できれば良いと思います。

歯ブラシやマツイ棒は子供たちにも大人気でした。子供たちも使う分があると、より良いのかもかもしれません。

4. 【児童】 保健委員会

当初は教師と保護者のみで行っていた除菌・清掃活動は、文部科学省のマニュアルの更新とともに、以前のように児童も参加できるようになった。今年度(令和5年度)、保健委員会でも常時活動として①手洗い場の清掃・石けん管理②トイレの石けん・消毒液管理③保護者用清掃用具の物品管理を行うことにした。きっかけは、保健委員会で年間計画を立てる話し合いでの児童の一言「おうちの人たちにしてもらえばかじりやなくて、私たちがやらなアカンと思うし、やりたい!」そこから保健委員の児童たちとどのような仕事が必要か話し合い、仕事内容を決定した。始めの頃は、保健委員会のボランティア児童が中心となって行っていたが、現在は全員が参加できるよう当番制で実施している。当番制を始めたころは、当番を失念している児童が見られ、全員で実施できるのは月に1度の委員会活動での清掃のみとなってしまうことも多かった。次第に、児童同士で声を掛け合ったり、当番表を活用したりしたことで、徐々に責任感が生まれてきた。保護者の方が、この活動の様子を知って「ありがとう」と声をかけてくれたり、下級生と一緒に手伝ってくれたりした経験が児童一人ひとりの原動力となり、自ら動き出す子どもを育成したと言えるだろう。

保健委員会の活動の様子 清掃用具棚への物品補充 手洗い場の石鹸補充



5. 最後に

この活動を通して「主体的に取り組む態度」が私たち教職員や保護者に身についたことが、成果の一つとして挙げられる。4年前、私たちは新型コロナウイルスにより、今まで経験したことのないほどの健康の危機に直面し、生活が一変した。振り返って気付いたことは、変わらなければならなかったその状況が、私たちが突き動かしていたということである。ここで紹介している活動は、保護者の他にも、卒業生や学生ボランティアにも協力してもらい実現したことも多いことから、本校ならではの活動の結果であり、どの学校でも実現可能ではないかもしれない。ただ、学び続けた本校の姿勢は、児童の教育や発達の機会を守ることに繋がった。そして、その姿勢をもってこの窮地を乗り越えたことが、私たちの自信となった。この先に、予測不可能な危機があるかもしれないが、この経験を糧に乗り越えていくであろう自分たちの姿を、未来の展望とした。